

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「馴化」って知ってますか？～

さあ！2学期が始まります。そこで・・・今回の通心（信）は・・・「馴化」です。
 「馴化」・・・「じゅんか」と詠みます。この「心理学における概念」を知っていますか？
 「馴」の字は・・・「馴（な）れ」とも使いますね。
 「順応」（adaptation）は、「きつい匂いをかぎ続ける内、あまり匂いを感じなくなる」ように、刺激により、感覚器の感覚神経細胞が興奮し続け、疲労してそれ以上興奮することが出来ない状態をいいます。
 これに対し、「馴化」（habituation）は、「大きな花火の音を聞き、最初は驚くが、短期間のうちに繰り返し鳴っていると、次第に毎回の音にびっくりすることが減っていく。」ように、最初は「大きな音＝危険」と思っていたものが、「大きな音＝危険ではない」と学習されたことにより、驚かなくなったのです。
 馴化では、身体的に刺激を知覚し、それに反応することが出来るけれども、反応する必要が無いことを学習したために、反応が低下するということです。

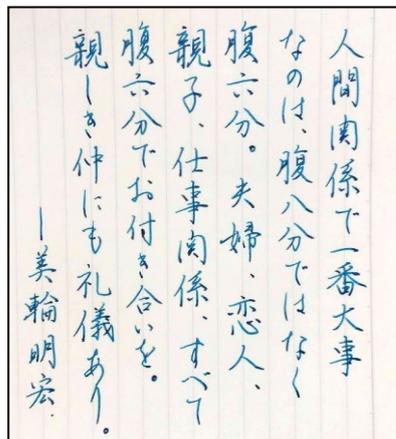
戦争を描いた本には人間の悲しい変化が描写されています。
 強制収容所では・・・
 「仲間が殴り倒されても目をそらしたりしない。無関心に何も感じずに眺めていられる。」
 （ヴィクトール・フランクル「夜と霧」）

心理学の用語で「馴化」という。
 ある刺激が長期にわたって、繰り返し与えられると、その刺激に鈍感になり、反応が徐々に薄れるようになる。・・・

ロシアのウクライナ侵攻が続いている。
 私たちも日々伝えられる戦況のニュースを聞き流してはいないか。
 「とにかく平和を・・・」「一日も早い停戦を・・・」と願った心がすり減ってはいないか。
 多くのウクライナの兵士や国民、ロシアの兵士が亡くなっているというのに・・・そして、その家族が嘆き苦しんでいるというのに・・・
 ローマ教皇が・・・「悲劇的な現実には慣れることがないように」と呼びかけた。
 だが、こうした警鐘の言葉にも我々は慣れてしまうのだろうか。
 慣れれば慣れるほど人間は無関心になれる。
 歴史が教えてくれる悲しい事実だ。「馴化」に抗（あらが）うすべは・・・ないものか。

『神戸新聞』2022年7月1日『正平調』より

「馴化」・・・人間関係にも言えることかもしれませんね。
 「馴化」によって、親しいから、長い付き合いだから「冗談だと受け取ってくれる」と、相手への心配りを忘れて、知らないうちに、傷つけるつもりはなくても、相手を傷つけてしまうような言葉を使ったり、行為になったりしていることはないでしょうか。
 普段の何気ない会話や行動、SNS上で使っている言葉について・・・
 校訓の「忠恕」（相手の立場になって、ともに解決策を考える）の心で考えてみませんか？
「親しき仲にも礼儀あり」って言葉がありますが、美輪明宏さんが右のように書かれています。



ただし、君たちはまだ高校生です。問題や悩みなどの相談は六分ではなく・・・**100%**で・・・私たち大人にしてくださいね

「馴化」した県高生活にならないように。「馴化」に抗（あらが）うすべは・・・**あるはず**です。」